

長野県伊那市におけるMIMの取組

I 伊那市における教育環境・状況

1 伊那市における基礎情報（平成26年度5月1日現在，人口を除く）

- (1) 人口 70,037名
- (2) 学校数 小学校15校，中学校6校
- (3) 児童・生徒数 小学校3,805名，中学校1,977名
- (4) 通級指導教室および特別支援学級の設置状況

① 小学校

通級指導教室

言語障害（市）「ことばの教室」	1校，	2教室，	32名
学習障害（県）「まなびの教室」	1校，	1教室，	13名

特別支援学級

知的障害	12校，	14学級，	45名
情緒障害	13校，	25学級，	139名

② 中学校

通級指導教室 0校

特別支援学級

知的障害	5校，	5学級，	24名
情緒障害	5校，	8学級，	38名

(5) 特別支援学校設置状況

県立特別支援学校 1校

- ・ 県立伊那養護学校（知的障害の小・中学部・高等部）

2 伊那市における発達障害関連の施策

(1) 文部科学省の委託事業

「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業」

実施期間：平成26年4月～平成27年3月（次年度継続希望提出済み）

概要：読み書きに困難のある児童の早期発見，支援を目的に，市内1校をモデル校にして，MIMの導入，スクリーニング検査の実施，個に応じた指導方法の研究をしている。

(2) 県の委託事業：なし

(3) 市独自の事業：なし

3 伊那市における学力向上関連の施策

- (1) 文部科学省の委託事業：なし
- (2) 県の委託事業：なし
- (3) 市独自の事業

- ① 全国標準学力検査の実施と分析・活用

実施期間：平成17年度より，小学校15校，中学校6校において実施。

実施教科：(平成26年度)小4算数，小5国語・算数，小6国語・算数，
中2国語・数学・英語

概要：伊那市小中学校学力検査検討委員会において，検査結果の分析を行い，全国学力学習状況調査との比較検討や分析結果をもとに各校に授業改善に向けての提言を行っている。また，委員会の事業として「学力向上のための実践事例発表会」を開催し，学力向上に向けて優れた取組を行っている学校の実践事例を市内の小中学校に紹介し，域内における教育指導等の改善に向けた取組を推進している。

- ② 学力向上支援事業

実施期間：平成17年度の文科省委託をきっかけとし，平成19年度から市独自で支援事業を実施。

実施内容(平成26年度)市内全中学校(6校)において，学習ボランティア(全51名)を配置。

概要：伊那市内の中学校において，地域からボランティアを募り，各校の実態に応じて学習支援を行っている。特に放課後学習支援においては，多くの生徒が地域の方の支援を受けて充実した学習活動を行っている。

4 発達障害のある子ども等への支援のリソース

- (1) 支援員等の人的支援

- ① 特別支援教育の支援介助員等

概要：市費の介助員(非常勤：要件として，学校教育，障害への理解がある者)26名(小学校25,中学校1)，講師(非常勤：教員免許状取得者)1名

- ② スクールカウンセラーを小中学校に複数配置

概要：県費4名(市費で400時間をプラス)，市費1名

- ③ 子どもと親の相談員

概要：県費1名，市費12名

要件は，教員免許，養護教諭，カウンセラー資格保持者など相談業務が可能なる者。職務内容は，不応児や保護者の相談・支援を学校，中間教室，スクールカウンセラー，子ども相談室等と連携して行う。

- ④ 学習支援員

概要：専科講師2名(小学校1，中学校1)

教員免許を取得している者。職務内容は，不応児の学習支援，適応指導等。

- ⑤ 市費特別加配講師（非常勤）
概要：中学校 9 名
 - ⑥ 外国籍児童生徒支援（ポルトガル語，中国語）
概要：小学校 4 名，中学校 1 名
- (2) 教材等の提供といった物的支援
学校の学力向上をめざす情報推進事業
概要：市内 6 中学校区へそれぞれ 40 台のタブレットを配付し，それぞれのニーズに応じた学力向上支援に活用している。特別支援教育をはじめ，課外活動，体育，英語，理解，社会科等で活用している。
- (3) 公的な相談・指導機関
伊那市役所教育委員会子ども相談室
概要：教育相談員，臨床心理士，作業療法士，言語聴覚士らによる発達相談が受けられる。そのほか，児童発達支援事業の放課後等児童デイサービスとして，3 年生から 6 年生の発達障害がある児童にソーシャルスキルトレーニングと小学生の保護者向けにペアレント・トレーニングを提供している。
- (4) その他
中間教室登校支援
概要：登校しても教室に入ることができない場合は，登校できる場所（中間教室等）などを活用し，支援員が登校サポーターとして学習を支援する。子どもの心に寄り添いながら，スモールステップで教室復帰をめざす。

II 自治体における MIM の取組

1 MIM に取り組むことになった経緯

- (1) 伊那市教育委員会では不登校などの二次障害を防ぐため，平成 24 年度から読み書き支援事業を開始し，スクリーニング検査や効果的な指導について検討を始めた。平成 26 年度より LD/ADHD の通級指導教室が市内（伊那北小）に開設され，専門性の高い職員が配置されることになった。職員が MIM 研修に参加し，教材として学習に取り入れている中で，有効性を実感し，伊那市としても取り組みたいと考えた。
- (2) 文部科学省の「平成 26 年度発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業」に，読み書き障害の児童への対応を研究するために申請することとした。その一環で MIM を導入した。

2 MIM に関する実施計画

- (1) 平成 26 年度：モデル校 1 校(伊那北小)で実施
 - ① 平成 26 年 5 月 MIM 研修会の実施
「多層指導モデル MIM (ミム) つまずきのある読みを流暢な読みへ」
講師 国立特別支援教育総合研究所 海津亜希子先生
対象：伊那北小学校全教職員および市内特別支援コーディネーター
 - ② 1 年生の授業に MIM を取り入れる
 - ③ 1, 2, 4 年生で MIM-PM に取り組む (理由：2 年生は特殊音節の獲得が不安定の児童が多いため実施。4 年生は担当職員が興味をもったため実施)
 - ④ 伊那市特別支援コーディネーター会で MIM の紹介をする
- (2) 平成 27 年度：市内全 15 校の小学校 1 年生で実施

3 MIM に関する事業における行政の具体的役割

- (1) 教育委員会の「読み書き支援事業」として、全市をあげて取り組みたい内容に位置づけ、目的や内容を校長会、教頭会で説明し啓発する。平成 27 年度は読み書き委員を校務分掌に組み入れ、組織的に取り組む体制をつける。
- (2) MIM の指導方法を広めるため、市内の教職員を対象とした研修会を実施する。
- (3) MIM アセスメント・指導パッケージを一括購入し活用を促す。MIM の指導の中で必要な教材をまとめて作成し、必要に応じて貸し出すなどし、教員の負担軽減を目指す。
- (4) 先行しているモデル校と連携し、モデル校の実践を未実施校に紹介、見学や相談がしやすいよう仲介する。

4 MIM に関する研修

- (1) 平成 26 年度
 - ① 回数：1 回
 - ② 内容：モデル校における MIM の研修会
 - ③ 目的：MIM の内容を教職員に理解してもらう。
読み書きの獲得に困難さをもつ児童がいることを理解してもらう。
 - ④ 時期：5 月 16 日
 - ⑤ 講師：国立特別支援教育総合研究所 海津亜希子先生
 - ⑥ 対象：伊那北小学校全教職員、および市内特別支援コーディネーター
 - ⑦ 感想 (アンケートより)：
 - ・とても勉強になった。何となく通り過ぎてきたけれど、取りこぼしてしまっていたことだったので、特にどう教えていったらいいのか、具体的に教えていただいたのがとても良かった。すぐに授業に取り入れることもできた。今後、1st ステージと 2nd ステージの混合の時の対応や、日々の授業や年間の中でどのように位置づけていくか考えていきたい。
 - ・現在促音の学習で、「音が消える。でもある」という読み方で動作化を入れている。子どもがとても楽しそうに取り組み、「まくら→まっくら」にするには、

どこへ「っ」を入れたらいいか考える場面で、動作化すると言葉にしやすい、イメージしやすいようである。「わかった」という反応をしてくれる子がたくさんいた。

5 MIMに関する事業についての現時点での成果

- (1) 読みに困難がある児童をすばやく把握でき、つまずきに対する支援が少しずつ進められた。
- (2) MIMの教材を使って1年生が楽しく学習を進められた。
- (3) 全校の児童がこれまでよりもことばに親しむことができた。

6 MIMに関する事業についての現時点での課題

- (1) 1年生の指導で取り入れたが、授業の工夫は個々の担任に任せていて、情報交換や共有して研究会を実施するなどができなかった。
- (2) 2ndステージ指導、3rdステージ指導の支援方法がつかめていない。
- (3) 研究がしっかりされている指導方法なので、独自に効果の検証をしていないが、教員のモチベーションを高めていくためには、必要であると感じる。どの客観的手段を用いたらよいか、比較検討をどうすればよいか悩んでいる。

7 MIMに関する事業を進めるにあたって期待すること

- (1) MIMの実践により、ひらがなの特殊音節の習得、読みの問題を抱える児童が少しでも少なくなっしてほしい。
- (2) MIMの実践により、教員による子どもの特性の把握が的確になり、行動の問題がない児童でも早くから支援が受けられるようにしていきたい。
- (3) 子どもたちが「学ぶことは楽しい」と感じられる環境をつくりたい。
- (4) 基礎学力をつけ、全体の学力向上を目指したい。

8 MIMへの要望

- (1) MIM-PMの個人レポート（月別経過の折れ線グラフ）で、数値が高い児童は枠からはみ出してしまうので、高い児童も枠に入るようにしてほしい。
- (2) Webサイトによる情報提供があるとありがたい。

9 今後MIMに関する事業を進めようとしている自治体へのアドバイス・メッセージ

子どもが楽しく学習を進められるMIMなので、教員も一緒に楽しんで取り組んでいただきたい。